

地域社会における高齢者の生涯学習 —学習機会への参加と成果—

塩谷 久子

(安田女子大学大学院 広島国際大学医療保健学部)

【要約】

高齢化に伴うライフスタイルの変化は、高齢者の多様なニーズを生み出しており、その一つとして、生涯学習への参加者も増加している。本研究は地域社会の生涯学習機会に参加している高齢者が、それによって何を、また、その結果をどのように活用しているかを実証的に明らかにすることを目的としている。

調査研究の結果によると、学習機会への参加は高齢者の学習の深化・発展に大きく役立っており、その成果は「交友関係の形成」「気力・体力の向上」「社会関心の拡大」など多面的に認知されている。さらに学習の成果は高齢者個人の人生・生活・健康の充実・改善と同時に種々の社会活動にも生かされている。これらの諸事実は、学習機会への参加が、高齢者の学習面のみでなく、生きがいの創出や社会貢献活動の活性化の面においても、重要な役割を担っていることを示すものであり、地域における生涯学習機会の整備と充実が高齢社会問題の解決に通じることを示唆している。

1. はじめに

われわれは世界で最も高齢化率の高い国に生きている。平成 10 年度の 65 歳以上の高齢人口は総人口の 16.2%を占め、平成 9 年の簡易生命表による平均寿命は男性 77.19 歳、女性 83.82 歳となっている。このような長い老年期の出現は、高齢者のライフスタイルを大きく変化させた。男性では定年退職後 20 年以上、女性では子育て終了後 30 年以上の人生を生きる時代となったのである。

この高齢社会のライフスタイルの変化により、高齢期は衰退、下降という暗いイメージから、自由時間を活用し、今までに貯えた豊かな知識・経験を社会へ還元するといった積極的なイメージへと転換されつつある。高齢者自身も、老後を余生と考えるのではなく、積極的に新しい人生を切り開き、生活を楽しみ、自己実現をめざすようになり、またその力を備えている。このような高齢者のニーズに対応するために地域社会では多様な生涯学習機会が提供され、高齢者の積極的な参加が見られる。

こうした社会の高齢化と高齢者を取り巻く環境の変化の中で、地域の高齢者を対象として提供される組織的な学習機会は、その参加者にどのような成果と効用をもたらしつつあるのか、また、今後その充実・改善に向けて何をどうしたらよいか、本研究はこれらの問題を、学習機会の利用者の立場から実証的に明らかにする事例研究として計画・実施したものである。

2. 研究の対象と方法

(1) 調査対象

当該市内在住の 60 歳以上を参加資格とする東広島市熟年大学に調査の時点で在学・出席していた受講者全員（170 名）と提供機関の関係者及び講座担当講師若干名

（2） 調査方法

教室における受講者への質問紙の説明・配布、留め置き回答・回収調査と学習機会提供者及び講師への個別面接調査

（3） 調査期間

1999 年 2 月 3 日 ～ 2 月 23 日

3. 調査結果の処理と分析のフレーム

（1） 調査結果の処理

質問紙調査の結果は全体の動向と属性別特徴を統計的に明らかにするために量的に処理し、面接調査の結果は記録し、資料として整理し質的分析に使用した。

（2） 分析のフレームと結果の概要

① プログラム特性と回答者のプロフィール

人口 11 万人の東広島市には、一般成人を対象とする多様な学習機会が提供されているが、高齢者を対象として、継続的に年間を通して安定的に学習機会を提供しているのは東広島市社会福祉協議会が計画・実施している「東広島市熟年大学」のみであり、これを調査対象とした。

「東広島市熟年大学」は 1980 年から開設され、趣味・教養、健康維持、社会活動など多様な学習内容のプログラムから構成され、講座には年間 15 回、合計 30 時間の一般講座（定員 660 名）と年間 5 回の特別講座（定員 140 名）がある。講座数は一般講座が 22 コースと特別講座が 4 コースある。会場は市内 4 ヶ所の福祉センターである。その目的は「生きがいを求め、社会参加をし、質の高い人間性と生活の実現」をはかることである。

参加者（回答者）は女性がやや多く（53.5%）、年齢別では 60 歳代と 70 歳代が約半々で両者を合わせると全体の 93.0%を占めている。職業では、農林水産業 25.9%、無職 47.1%となっているが、無職の人の前職は、公務員、会社員、団体・公益法人が 54.7%となっている。学歴別では大学卒が 18.9%、高校卒が 54.7%であり、この年齢集団としては相対的な意味でかなり高学歴者により構成されているといえよう。参加年数の長さは一人平均 3.3 年であり、繰り返し参加している。4 年以上の参加者は 35.3%である。

② 講座への参加の目的と成果

受講者の熟年大学への参加目的は回答率の高い順に「趣味を豊かにしたい」76.5%、「健康増進や体づくりのため」72.9%、「他の人との親睦を深めたり、友人を得るため」67.1%、「自由時間を有効に活用するため」52.4%であり、この 4 項目が半数以上の支持を得ている。熟年大学においては、趣味に関するものとして書道、園芸、華道、俳句、詩吟、絵画、茶道、陶芸などの講座が開かれている。

このような参加目的に対する学習成果としては「あなたが熟年大学に参加して得たものは何ですか」という問いに対し、多い順に「新しい友人ができた」51.2%、「趣味が豊かになり心が潤った」50.0%、「自由時間を有効に活用できた」34.7%となっている（図1）。

図1 学習の目標と達成状況

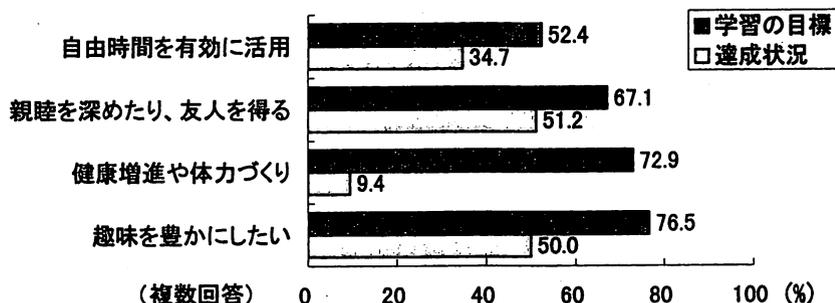


図1は、地域における高齢者が学習活動に対して何を期待し、何を得ているかを示しているが、参加目的通りには学習成果はあがっていないのが全般的な特徴である。しかし細かく見ると項目によって大きな差異があり、特に目的における健康志向の高さに対する成果は低く、両者の間には大きなギャップが存在している。しかしこれ以外の面ではかなりの程度まで学習の成果があったと認知されている。

退職後や子育て終了後に手にいれた自由な時間を持ち、趣味・教養を豊かにすることを目的に学習活動に参加し、その中で人間関係を拡大し、活動的で心豊かな高齢期をめざしている高齢者の姿が見えてくる。

また、「参加された講座について・学習は楽しかったですか」という関連質問には90.6%が「楽しかった」と答えており、さらに、「全15回の講座への参加は学習の深化・発展にどのように役だったと思いますか」という質問では92.9%が「役立った」と回答している(図2)。

前述したように60歳代・70歳代が93%を占める集団で参加したほとんどの人が講座での学習が「楽しく」かつ

「役立っている」と肯定的に答えているのである。これは現在提供されているプログラムに対する受講者の高い評価を示すものだといいよかるう。

このような学習機会への参加は学習の直接的な成果のみではなく、参加に内在する総合的な効用に関する調査結果によると、参加は高齢者の精神的・身体的諸機能にも強いインパクトを与えている事が明らかになった。すなわち、熟年大学の参加者に対して「交友関係」「気力」「知力」「社会的関心」「体力」の5点について「参加の前後にどんな変化があったと思いますか」と質問した結果、「交友関係」においては80.6%の参加者が「拡大・深化・強化した」と答えている。他の4点においても60%台から30%台の参加者が自己の能力が拡大・深化・強化したと答えているのである(図3)。

図2 学習の成果 (%)

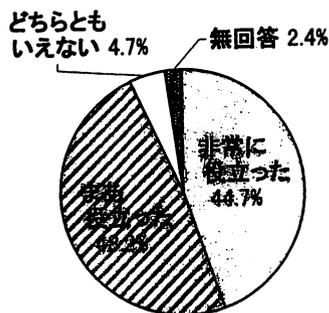
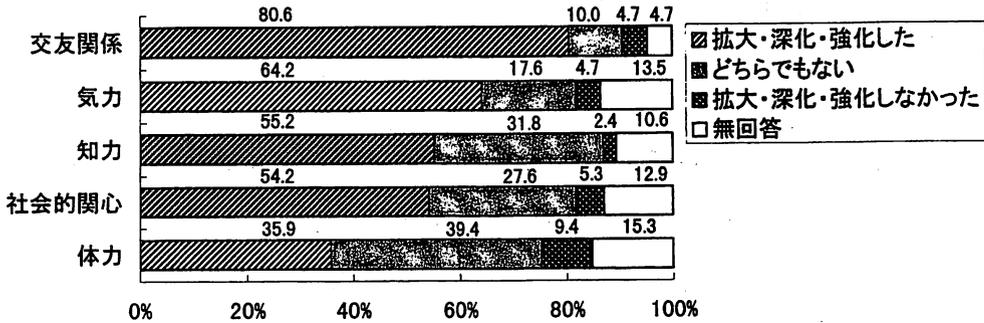


図3 学習参加前後の変化



交友関係については、参加目的として「親睦や友人を得る」ことを67.1%があげていたが、参加によって、これが拡大・深化・強化したと認知している人の率ではそれよりもかなり高くなっている。これは先に述べたこの講座への高い評価を支えている理由の一つと考えられる。

次に気力、知力、社会的関心においても過半数の人が拡大・深化・強化したと答えている。これらは、学習機会への参加が高齢期の精神生活の豊かさの維持・充実のために重要な役割を果たすことを示唆するものであり、今まで一般に考えられていた「高齢期は学習能力や人間機能が下降、衰退する」というイメージを払拭するものとなっている。

体力に関しては、このプログラムの性格にもよるが、それでも、35.9%の人が拡大・深化・強化したと答え、39.4%がどちらともいえない、拡大・深化・強化しなかったという人は9.4%にとどまる。

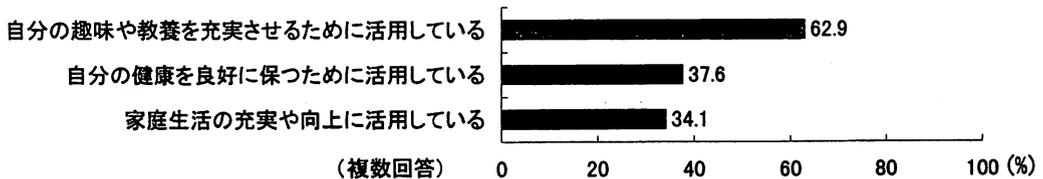
このように今回の調査によって、学習機会への参加は、高齢期においても、趣味・教養を豊かにし、人間関係を拡大するだけでなく、多面的な人間の諸能力や諸機能の維持・増幅に貢献する力を内在することを明らかにすることができた。

③学習成果の活用と意義

次に学習機会への参加により身につけた学習の成果を学習参加者はどのように生かしているであろうか。その実態の把握は、高齢者の学習を媒介とする社会活動への参加や、学習成果の活用を見越したプログラム開発に参考に供されるところが大きいものと思われる。

「熟年大学で身につけた知識、技術や経験を、どのように活用していますか」という問いに対する回答の上位3項目を示したのが図4である。

図4 学習成果の活用

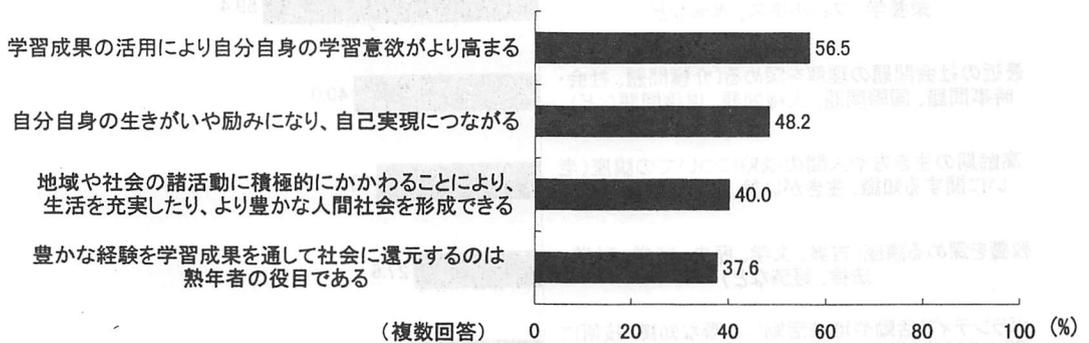


「自分の趣味や教養の充実」が62.9%で他の項目の約2倍となっており、「自分の健康」や「家庭生活」への活用は30%台となっている。この表には示していないが、これら以外の活用分野として、さらに、「地域活動」21.2%、ボランティア活動13.5%、高齢者間の相互支援活動11.8%などがあげられている。それらの合計は延べ46.5%となる。これは高齢学習者の社会的活動に対する関心の高さとその貢献度を示唆するものである。

このような学習成果の活用は、一方で自己表出的活用と他方で道具的活用という両面からアプローチすることができる。前者は個人の人生・生活の充実や人間的成長及び自己実現への活用にかかわり、後者は、例えば高齢者の自立性や生活技能の維持・改善や社会的貢献における活用にかかわる。両側面の活用は密接な結びつきがあり、両者を切り離して取り扱うことは困難であるが、人間のライフサイクルにおける高齢期の位置づけに留意すると、その学習成果の活用は自己表出的活用を優先的に考えることに異論はないであろう。

この関連で、このような問題意識のもとに、この研究では高齢学習者自身から見た学習成果の活用の意義について設問を試みた。その調査結果を支持率の高いものから順にあげたのが図5である。

図5 学習成果の活用の意義



学習成果の活用の意義として、最も支持率の高いのは「自分自身の学習意欲が高まる」(56.5%)であり、つぎに多いのは「自分自身の生きがいや励みになり、自己実現につながる」(48.2%)である。これらに続いて約40%の人が、その意義として「生活の充実や人間関係の形成」あるいは「高齢学習者の社会的役割」をあげている。

これは学習成果の活用の意義としての選択肢に対する回答結果の中から支持率の高い項目を抽出した結果であるが、いずれも相対的な意味で自己表出的な活用に意義を見出しているのが特徴である。言いかえるとこれら以外の職業的・社会的活動における「手段的な活用」に対しては、すべてこれらの項目よりも低い支持率しか与えられていない。このことは、この時期の学習がこのような形で学習者の生き方や生活の充実との関連において実行されることによるものと思われる。

④ 学習機会の充実・改善への課題

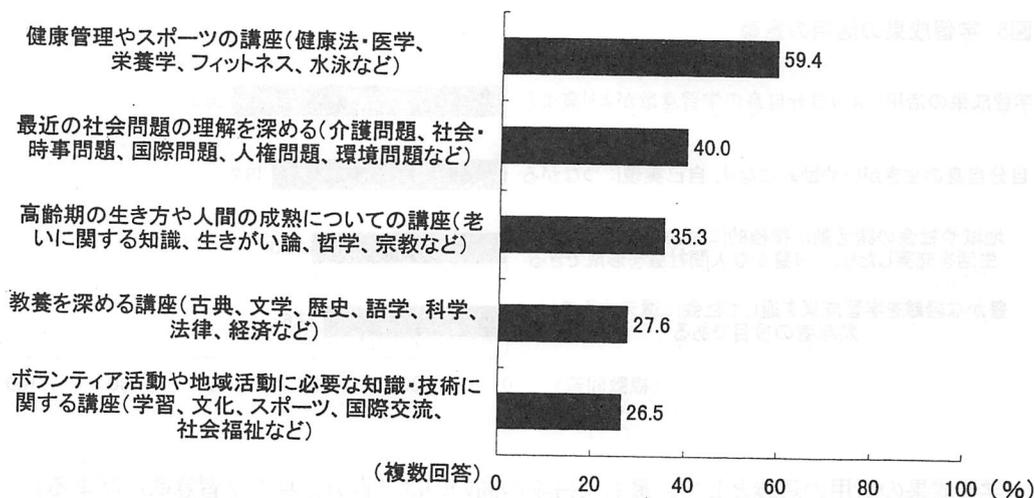
これまで見てきたような熟年大学の修了者に対して、最後にそこでの学習経験を踏まえ

て、現在の学習機会をどんなに充実・改善すると、高齢期を充実して過ごすためにさらに役立つものになるかについて、一方で拡充すべき学習内容や講座について、他方で学習機会の提供方法や運営方法も含め、学習支援方法と学習環境の整備事項について質問した。前者の調査結果は図6に示し、後者のそれは図7に示す通りである。なお、ここではいずれも20%以上の支持を集めた回答項目だけを支持率の高いものから順に表示している。

健康管理が、要望する講座の筆頭にあがっているが、高齢者にとっては最も関心が高く、切実なテーマである。しかし、施設面での制約があり社会福祉協議会主催の熟年大学のみで対応するのは難しいであろう。地域におけるいろいろのスポーツ施設の協力のもとに、この方面の学習活動の充実・整備を期待したい。

2番目にあがっている社会問題については介護保険制度の導入など制度が大きく変る年でもあり、希望者が多くなっているのであろうが、一般に高齢者に対してこれまで社会問題・時事問題についての講座が希薄であったことを反省させられる回答結果となっている。

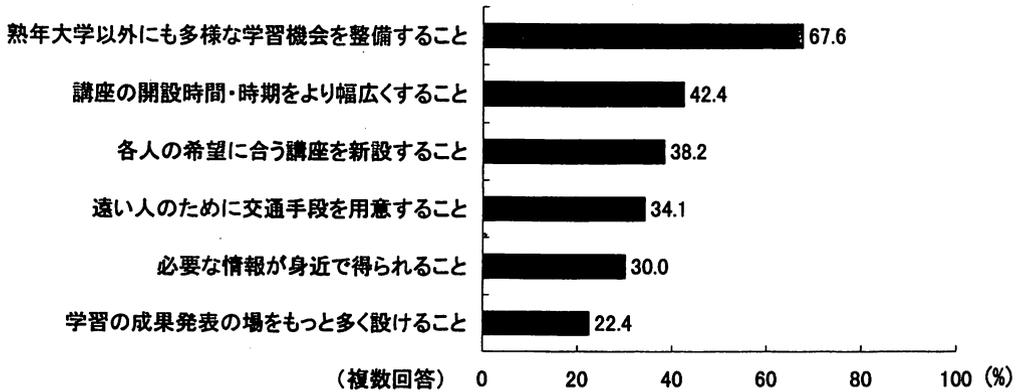
図6 今後拡充を必要とする講座



つぎの高齢期の生き方や人間の成熟及びその次の教養講座は、この時期における人間的成長に関する学習内容であるが、これらへの学習ニーズはともにこの表には示してない趣味志向型講座(17.1%)を上回っている。さらにボランティア活動などに関する学習ニーズも4人に1人が表明している。

これらの受講者の希望と現在のプログラムとの間には明らかにギャップが存在している。このギャップの解消のためには、今後、受講者のプログラム企画への参加が必要であるように思える。

図7 熟年大学を改善するための提案



もう一つの学習機会の改善への提案としては、図7に示すように、実に参加者の67.6%が、熟年大学以外にも「多様な学習機会を整備すること」を希望しているのに注意しておきたい。このほかに42.4%は講座の開設時間や時期の幅を広げることを望み、さらに、講座企画へ、各自の希望の反映を求めたり、通学のための交通手段や学習情報に関するニーズも30%以上の参加者によって表明されている。これらのニーズは従来の高齢者観では対応困難であり、今や、高齢者の生涯学習をめぐる新しい状況に対応する質の高い学習機会の拡大と学習支援事業の充実が必要不可欠の課題となってきたように思える。

4. おわりに

以上、ここに明らかにした今回の調査結果に関連して、今後共通して検討や取り組みを深める必要のある若干の課題を整理し、本研究報告のまとめとする。

第一に、高齢者の学習能力や意欲はきわめて可塑的であり、学習機会や学習支援システムの整備との関連で柔軟かつ創造的な対応が必要であること。

第二に、しかしそのような考え方は今回の調査対象に対してだけあてはまるのかどうかについて、他の学習機会への参加者集団、あるいは非参加者集団と参加者集団との比較などによる検証なしには、その一般化には限界があること。

第三に、地域の組織的な学習機会は高齢者の意欲や能力の開発と強化に「予想以上」に大きく重要な役割をはたしており、今後いわゆる高齢者問題の解決に向けた学習プログラムの充実と改善は地域生涯学習の優先的課題として位置づけることが必要であること。

第四に、学習プログラムの充実と改善に当っては、これまでの「余暇消費的」考え方を脱皮し、学習機会の提供からその機会を利用した学習成果の活用支援に至るまで、生涯学習のフルサービスの対象として対応することが必要であること、等。

なお、本研究の資料は、平成10年度文部省委嘱事業「生涯学習成果の評価と活用に関する研究開発」として、安田女子大学生涯学習研究所が取り組んだ調査研究結果を利用している。

参考文献

- 1) 「国民の福祉の動向」厚生統計協会,1998.
- 2) 池田秀男「高齢期の生涯学習支援哲学——理論図式の確立を目指して——」安田女子大学大学院博士課程開設記念論文集, 1997.
- 3) 池田秀男「生涯学習をすべての人に—21世紀に向けた OECD の生涯学習政策—」安田女子大学生涯学習論集 第1集, 1998. pp.23 - 33.
- 4) 金藤ふゆ子「生涯学習プログラム編成の類型とその規定要因—生涯学習施設・機関の種類別比較」日本生涯教育学会年報 第17号, 1996, pp.91—106.
- 5) 金藤ふゆ子「生涯学習プログラム編成における計画・立案の主体別にみた類型とその規定要因」日本生涯教育学会年報 第19号, 1998, pp.98—111.
- 6) 葛原生子「中高年期の生涯学習の課題」日本生涯教育学会年報 第13号, 1992, pp.53—64.
- 7) 塩谷久子「東広島市熟年大学」『生涯学習成果の評価と活用の促進に関するヒアリング等調査』報告書・分析編, 安田女子大学生涯学習研究所, 1999.2, pp.28—31.
- 8) 山邊光宏「高齢期の人間形成論的考察」安田女子大学生涯学習論集第1集, 1998. 3, pp.1—11.